

はじめに

兵庫県森林動物センター（以下、研究センター）は、ワイルドライフマネジメントに係わる研究成果を、野生動物の保全と管理に関わる業務を行っている行政担当者や実務者、技術者、研究者などへ実務に有益な知見を提供することを目的として、平成 20 年度から「兵庫ワイルドライフモノグラフ」を刊行してまいりました。今回、第 12 号として特集「兵庫県における外来哺乳類の現状と課題」4 編と原著 1 編の 5 編を収録しました。

個体群生態学や群集生態学の創始者として知られる英国の動物研究者チャールズ・エルトンは、外来種研究でも強い影響を与えています。今から 70 年ほど前の 1952 年に出版されたエルトンの名著『侵略の生態学』（川那部・大沢・安部訳 思索社）では、外来生物による「生態爆発」が、世界各地の生態系に深刻な影響をもたらしていることを紹介しています。そして、可能な限りすべての地域において、生態学的な多様性を最大限に有する景観を保ちつつ増大させること、在来生物群集の生態的抵抗性を強めること、すなわち在来生物群集の多様性の保護が重要である、と警鐘をならしています。それから半世紀後に、外来種対策が国際規模の問題となり、1992 年の地球サミットにおいて生物多様性条約が締結され、外来種の侵入防止、制御、撲滅が謳われました。我が国では 2002 年に新・生物多様性国家戦略で外来種対応の位置づけがなされ、2005 年に外来生物法が制定され、外来種の取り組みの制度ができました。21 世紀のグローバリゼーションによって外来種は意図せずとも物流や人の移動によって世界中に広がる機会を得て、外来種問題が地球規模で深刻化しました。

兵庫県では外来生物法制定に先立つ 2003 年から県下全域の約 4000 農会を対象に、毎年、鳥獣害に関するアンケートを実施して、兵庫県に生息している各種鳥獣の生息や被害の動向に関するデータを収集してまいりました。本特集では、これらの情報をもとにアライグマを主題として 1 章で分布等の概要、2 章で市町ごとの行政施策をとりあげ、3 章では里山のキーストーン種である両生類（カエルとサンショウウオ）への影響を野外調査で明らかにし、4 章では研究センターと地域が一緒に取り組んで構築した、住民主体のアライグマの捕獲体制を「地域力」として紹介しています。その取り組みに困難な課題が多い外来種対策に、明るい展望を見いだすことができます。5 章では、アンケート調査をもとに在来の中型哺乳類 5 種（タヌキ、キツネ、アナグマ、イタチ、ノウサギ）が全県的に分布していること、過去（2006 年度）と比較可能なタヌキとアナグマは分布が拡大傾向にあることを紹介しています。

以上の論文は、長期モニタリングと野外調査、地域との連携によって得られた成果であり、持続的なモニタリングの重要性を物語っております。

最後になりましたが、「兵庫県ワイルドライフモノグラフ」は、編集委員が毎年設定するテーマに沿って執筆される論文等をモノグラフとして編集しております。皆様の投稿をお待ちしておりますので、詳細などについては投稿規定を参照してください。

兵庫県森林動物研究センター所長 梶 光一

目次

特集「兵庫県における外来哺乳類の現状と課題」

- 1 章 兵庫県の外来哺乳類（アライグマ・ハクビシン・ヌートリア）の
生息と農作物被害の動向（2004 - 2018年度）・・・1
栗山 武夫・高木 俊
- 2 章 兵庫県におけるアライグマ対策にかかる県・市・町の現状・・・24
畑一志・渡邊好信
- 3 章 兵庫県神戸市におけるニホンアカガエル繁殖期に
出没・カエルを捕食したアライグマの記録・・・35
栗山武夫・沼田寛生
- 4 章 住民主体によるアライグマ捕獲隊の活動事例～大山捕獲隊の活動記録～・・・49
横山真弓・西牧正美

原著

- 鳥獣害アンケートに基づく兵庫県における中型哺乳類の分布・出没状況と
その変化・・・67
高木俊

- 附録1 地域でのアライグマ捕獲の進め方（アライグマ捕獲の5原則）パンフレット・・・80
附録2 毎月発行した大山捕獲隊活動のチラシ（抜粋）・・・84
附録3 大山捕獲隊がまとめたアライグマの生態と捕獲のテクニック・・・90
附録4 中型動物の見分け方・・・91
附録5 兵庫の野生鳥獣害対策シリーズ2018⑤アライグマの被害防止・・・93